

名護貝塚

緊急発掘調査報告



1985年3月
名護市教育委員会

名護貝塚

緊急発掘調査報告

1985年3月
名護市教育委員会



はじめに

文献資料や伝承でさえも残されていない、古い時代の私たちの祖先が、どのような生活をしていたかを知ることの出来る貴重な資料として、遺跡や貝塚などの埋蔵文化財があります。私たちは、それらを発掘調査することによって、昔の人々の暮らしの様子を解明する手がかりを得ることが出来ます。

この報告書は、名護十字路付近の国道58号線・県道116号線の側溝工事に伴い実施された、緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

工期や周辺の状況から、調査区域が幅1.5mのトレーニング掘りでわずかな面積であったこと、また、すでにかなりの攪乱を受けていたことなど名護貝塚の全容を明確にするには至っていません。しかし、現在、表面踏査さえも充分に行なえない状況にあるなかで、今回行なわれた調査の成果は大きなものがあります。

今回の発掘調査およびこの報告書を通して、名護貝塚さらに埋蔵文化財に対する関心と理解を得られれば幸いです。

最後に、調査員、作業員の皆様には、交通量の激しい最悪の条件のなかで大変頑張ってもらいました。また、工事関係者、商店街の皆様にもいろいろご協力をいただきました。記してお礼を申しあげます。

1985年3月 名護市教育委員会
教育長 比嘉太英

例　　言

1. 本報告書は、名護市教育委員会が北部国道事務所の委託を受けて実施した国道58号線側溝建設工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 名護貝塚の県道部分については、開発部局の管轄が違うため分冊され、沖縄県教育委員会により報告される。
3. 発掘調査に際し、沖縄県教育委員会の協力を得た。
4. 調査は、昭和59年10月1日～5日、10月14日、10月24日の7日間に亘って行われ、直接工事に係る区域を調査対象とした。
5. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院作製のものを複製した。
6. 出土した資料の国道分については名護博物館に保管している。
7. 出土した貝類の同定は、水木晃氏（水木貝類コレクション）にお世話になった。
8. 石質の同定については、沖縄県立教育センターの大城逸朗氏にお願いした。

目 次

はじめに

例 言

1. 発掘調査に至るまでの経緯	1
2. 名護貝塚の位置と環境	3
3. 調査結果の詳細	5
(1) 発掘調査の範囲と方法	5
(2) 層序	7
(3) 遺構	9
(4) 遺物	10
4. 近世・近代の遺物	18
5. 調査の成果と課題	20

おわりに

1. 発掘調査に至るまでの経緯

名護市教育委員会では、昭和54年度から56年度まで、開発計画のある地域を重点的に、市内遺跡分布調査を行なった。その結果現在70余の遺跡・貝塚等の埋蔵文化財が確認されている。

名護貝塚は、それの中でも比較的早くから知られていた数少ない遺跡のひとつである。しかし、その範囲や内容については、貝塚全体が既にアスファルト舗装や店舗、住宅等で覆われている状況で、詳細は不明である。貝塚の保存状況は、コンクリート建店舗、住宅の建築の際にかなり破壊されたと思われるが、なお木造建や道路、空地等の部分には、土地攪乱を免れ良好に保存されている可能性がある。

昭和59年8月3日、名護貝塚と近接する名護十字路近くの県道116号線側溝工事現場から遺物包含層が確認された。側溝工事は、名護十字路で交差する国道58号線と県道116号線を沖縄総合事務局北部国道事務所と沖縄県土木建築部北部土木事務所がそれぞれ事業主体となって行なっていたものである。

翌日、沖縄県教育委員会と名護市教育委員会、北部土木事務所の三者で現地調査を行なったところ、名護貝塚と時代が一致しており、位置も近接しているところから名護貝塚の一部と判断された。そして、現場の状況から貝塚の範囲がさらに広がることが予想されたため、その地域については文化財保護法を順守し現状変更を行なわないよう、

発掘の経過



北部土木事務所に対し要請した。

その後、貝塚保存のため、側溝工事の方法、期間等について北部土木事務所と協議を行なったが、側溝工事はそれに続く歩道のカラー舗装工事、アーケード設置工事等との関連があって計画変更は困難であった。そのため、緊急発掘調査を行い記録保存することとし、発掘調査費用の負担について調整を進めた。

一方、国道58号線側溝工事についても、工事地区内に貝塚の含まれる可能性があったため、8月30日に北部国道事務所と名護市教育委員会が協議を行い、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。そして、発掘調査の範囲、期間・費用を明確にするため8月29日に県道部分、9月4日に国道部分の試掘調査を行なった。

9月26日、沖縄県教育委員会文化課、名護市教育委員会、北部国道事務所、北部土木事務所の四者で協議を行った結果、国道側溝工事部分の発掘調査については、名護市教育委員会が北部国道事務所の委託を受けて実施すること、県道側溝工事部分の発掘調査については、県教育委員会文化課が北部土木事務所の委託を受け実施することになった。

発掘調査は、国道部分が10月1日に着手され、調査費用の対応が遅れていた県道部分は10月8日に着手された。



発掘終了

発掘に参加する小学生



2. 名護貝塚の位置と環境

名護市は、沖縄本島北部の東シナ海につき出た本部半島の基部に位置し、北は大宜味村と東村、南は宜野座村と恩納村、北西は本部町と今帰仁村の6町村に隣接し、東に太平洋、西に名護湾と、そして風光明媚な羽地内海に面する。面積は210.73km²で、そのうち6割を山林が占める。市の中央部を南北に連なる多野岳・名護岳・久志岳の国頭山地、北西部に嘉津宇岳・八重岳の本部山地がある。平野部は、両山地に挟まれた羽地ターブックアと名護市街地が主なものである。また、羽地大川・屋部川・汀間川・久志大川など大小20数本の河川が市域を流れ海に注ぎこんでいる。

名護市は、1970年8月に名護町・屋部村・屋我地村・羽地村・久志村の5町村が合併して出来た県下9番目の市で、以前から名護港を中心とした海上交通、国頭街道を中心とした陸上交通の要地として発達し、現在では、名護湾の埋め立て及び国道58号線、国道449号線、沖縄自動車道等の交通網が整備され、北部の中核都市として目ざましい発展をしている。



図-1 名護市の位置



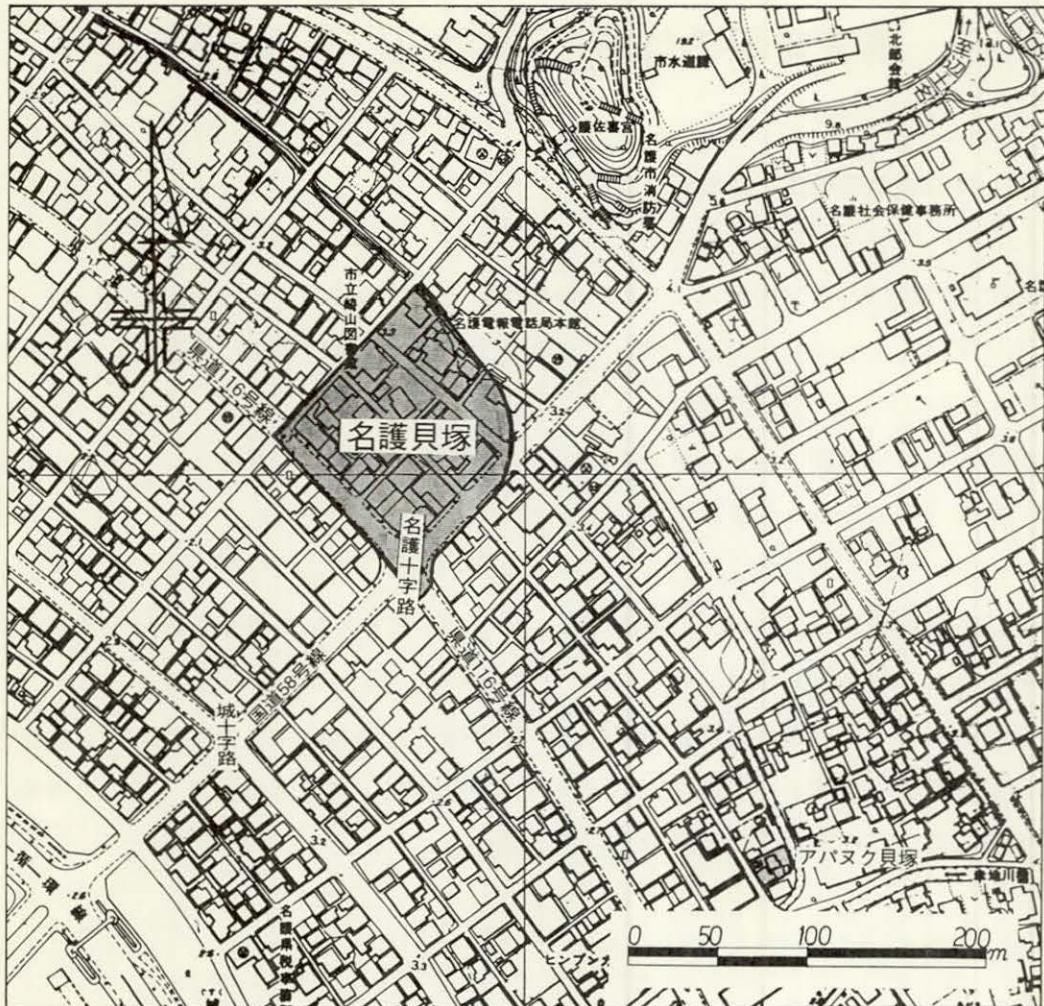


図-2 現在確認できる名護貝塚の分布範囲

名護貝塚は、名護市名護大兼久原の海岸砂丘地にあり、現在では国道58号線と県道116号線の交差する名護十字路一帯の市街地に立地し、埋め立て以前の海岸線から北東へ約300m、標高約3mの所にある。周辺にはナングシク・溝原貝塚・アバヌク貝塚等の先史・原史時代の遺跡が10ヶ所程分布しており、名護湾をひかえたこの一帯が当時好適な生活環境であったことが窺える。現在では市街化の進行が著しく、当時の海岸線や砂丘の状況を示す地形が消滅しつつある。本貝塚は沖縄貝塚時代後期の貝塚であることは以前から知られていた。これまでの諸開発等によってほとんど壊滅状態と思われていたが、今回の調査によって、僅かではあるが未攪乱の遺物包含層を確認することが出来た。

3. 調査結果の詳細

(1) 発掘調査の範囲と方法

発掘調査区のトレンチ総延長96m。調査期間7日間の日程で行なわれた。

側溝工事に伴う“緊急調査”であるため、工事図面を検討の上、側溝とりつけ箇所に1.5m幅のトレンチを設定した。

側溝工事の現場責任者と協議を重ねた上、発掘調査範囲を明確にし、工事工程や進行状況も考慮しながら調査を実施した。

トレンチ設定、地区名は図-5に示すとおりである。国道に係る(A、B、E、F)地区は名護市教育委員会が、県道に係る(C、D)地区は沖縄県教育委員会がそれぞれ調査主体となり、作業は協同して行なわれた。

名護十字路及びその付近は名護市における交通量の最も多いところであり、しかも発掘調査範囲の直前まですでに工事は進み、調査範囲、通行路の設置、土の処理等、市街地であるための制約が多い中で調査は進められた。

●地区設定

A地区 富士ツーリスト前から上江洲商店前に至る約74mの区間。

B地区 渡口楽器店前の約7mの区間。

E地区 スイス堂前の約7mの区間。

F地区 山宮商店前の約8mの区間。

以上が今回の発掘調査箇所であるが、A地区、B地区が、10月1日～5日、E地区

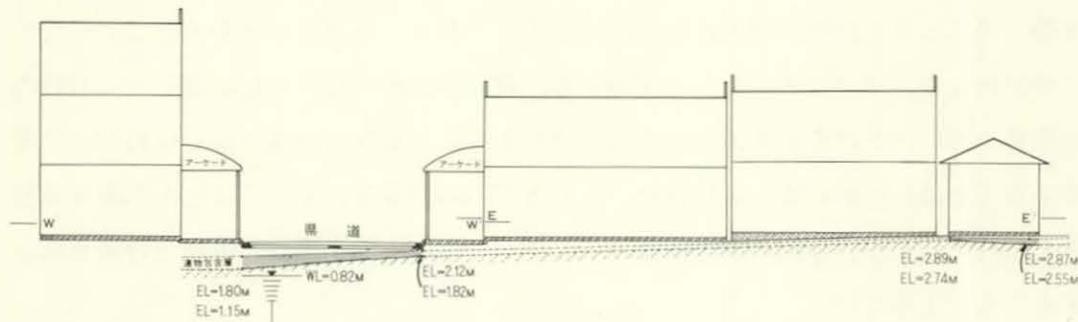


図-3 W-W'・E-E' 断面図

が10月14日、F地区が10月24日に実施された。

名護十字路商店街振興組合のアーケード建設と、国道58号線の直接工事に係る区間を発掘対象とした。なお、図-5に示したように、国道が十字路の曲線区間まで含むため、変則的なトレンチ設定となった。グリッドは2m単位(幅1.5m)で区切り、北側から1、2、3、……とナンバーを付した。4トレンチともほとんどが地山まで攪乱を受けており、僅かに、A-35~37とEトレンチで運良く破壊をまぬかれた遺物包含層が確認出来た。

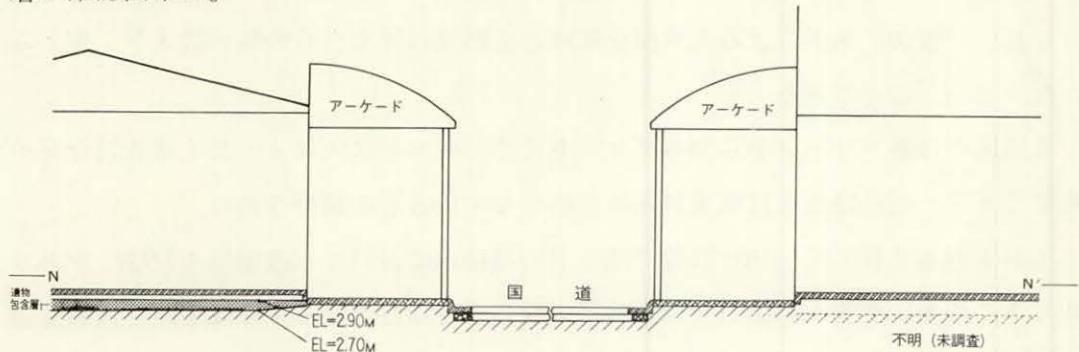


図-4 N-N'断面図

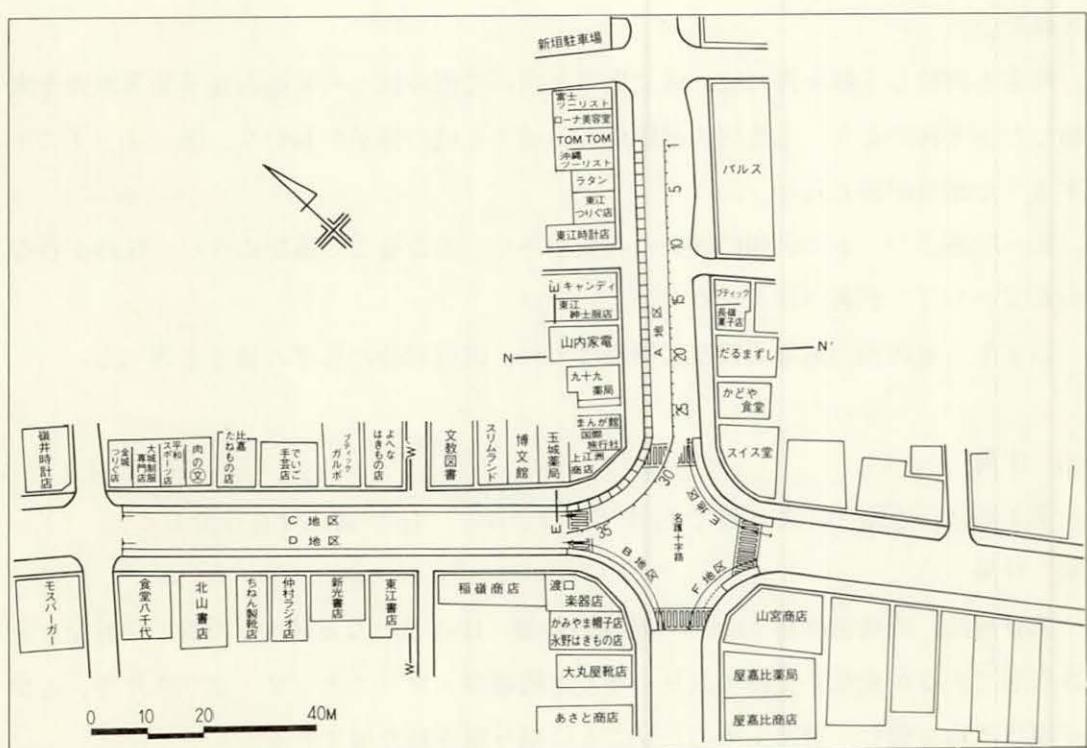


図-5 トレンチ設定図

E、F地区の設定は、先に名護市教育委員会の試掘調査により県道部分で遺物包含層が確認できたので、名護十字路の国道、県道の交差部にあたる曲線区間の発掘調査を実施し、名護貝塚の広がりを明らかにしていくためである。

(2) 層序について

名護貝塚の立地する砂丘地形について、発掘調査期間中に多くの市民から情報が寄せられ、「戦後、米軍による大規模な採砂と道路建設等で当時の地形は大きく変えられた」ということである。

A地区の10番グリッドから33番グリッドまでの44mの区間はまったく遺物包含層が確認できず、道路路盤下は名護貝塚の基盤をなす白砂層が観察された。

国道工事と並行して、16~21番グリッドの隣接地において木造家屋の取壊しがあり、さっそく地主に調査への協力を求め地層の観察を行ったところ、ほぼ道路下層路盤面と同レベルで遺物包含層が確認された。これらの調査と聞き取り調査より、10~33番グリッドの区間における国道部分の遺物包含層は道路建設の際に消滅したことが予想された。

地主と調整し了解を得た後、県文化課と合同で道路側との関連調査で発掘調査を実施した。それにより、宅地側の層序から砂層の堆積の様子がわかり、図-3、4に示すような結果が得られた。

10~33番グリッドの区間に砂丘の起伏があり、包含層ごと運び去られ、採砂が行なわれていたことが裏づけられた。

以下で、宅地側の地層の観察も検討に入れ、国道部分の層序の様子を述べる。

(イ) I層

第I層は、道路工による層でIaがアスファルト、Ibが切込碎石等である。

(ロ) II層

第II層は、灰褐色砂層(IIa)、暗褐色砂層(IIb)よりなる層で、土器・貝殻などを含む層であるが攪乱を受けており、多くは陶磁器・プラスチック・ガラス片等、近世~現代遺物を含む。道路工事のたびごとに掘り返された層である。

(ハ) III層

第III層は、黒褐色砂層(IIIb)、黄褐色砂層(IIIc)よりなる層で、土器・貝殻などを多く含む遺物包含層である。

IIIb層は、貝塚時代の層であるが、転圧を受けたように堅く引き締められている。部分的に攪乱を受けているものの、今回調査区において最も明瞭な形で標準層序を示すものとして確認できた層である。

IIIc層は、下層の白砂層にかけて漸次色調が薄くなり、地山への移行層として捉えた。土器・貝殻の出土頻度は、IIIb、IIIc層とも差異は認められない。

(二) IV層

第IV層は、白砂よりなる自然層である。粒子が細かく良質の砂で、基盤をなす。この白砂を掘り進み、地盤高82cmのレベルに達すると地下水が浸透し水が溜る。

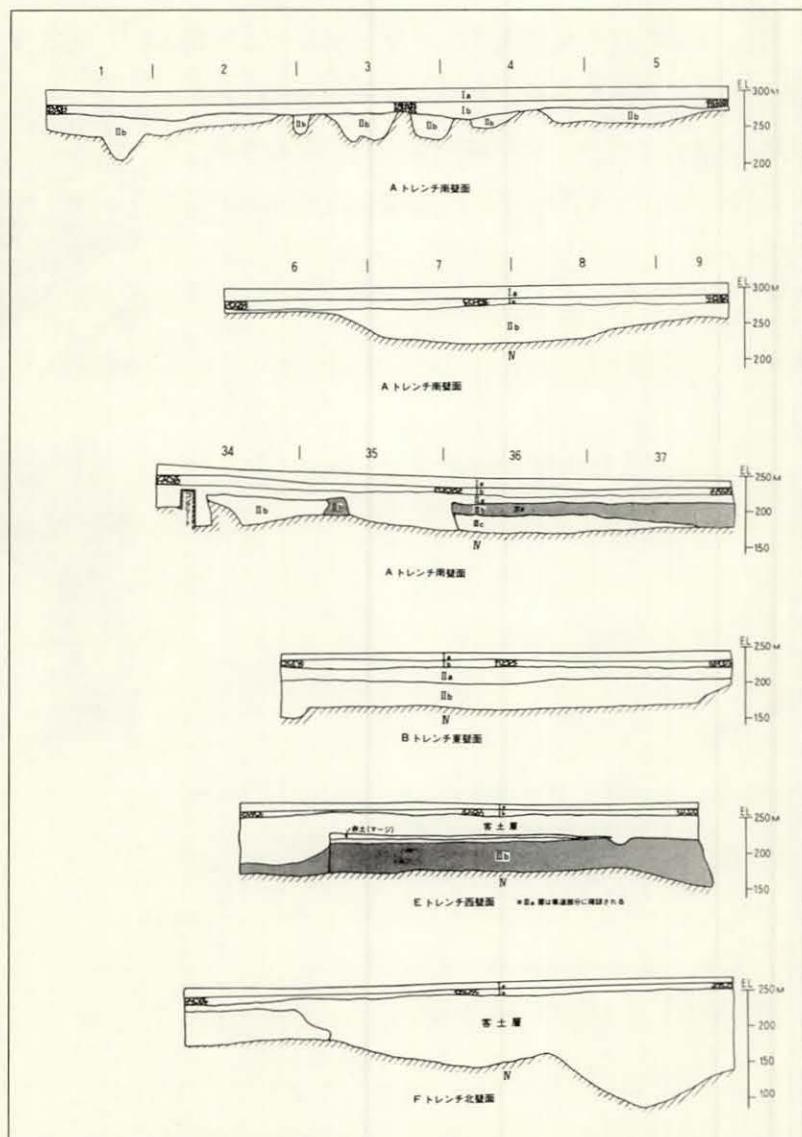


図-6 層序断面図

(3) 遺構

発掘区域がほとんど攪乱を受けている状況下、1.5m幅のトレンチを設定しての発掘調査であったが、国道部分についての遺構の検出は、調査がはじまると4トレンチとも地山まで攪乱されていることが予想され、期待のもてない状況であった。

また、いくぶん遺構面の残っている可能性のある歩道側の調査には限界があり、明瞭な形での遺構の検出はできなかった。

A地区の1番、4番グリッドにおいて落ち込穴とみられるのが3箇所検出された(図-7)。貝塚時代の生活面であったと思われる地盤面に、近代の遺構である石積の排水溝や水道管が埋設され、写真にみるようにほとんどが破壊されており、排水溝や水道管の埋設されてない道路中央部や宅地において遺構面が検出される可能性が高い。



遺構破壊状況



落ち込み穴

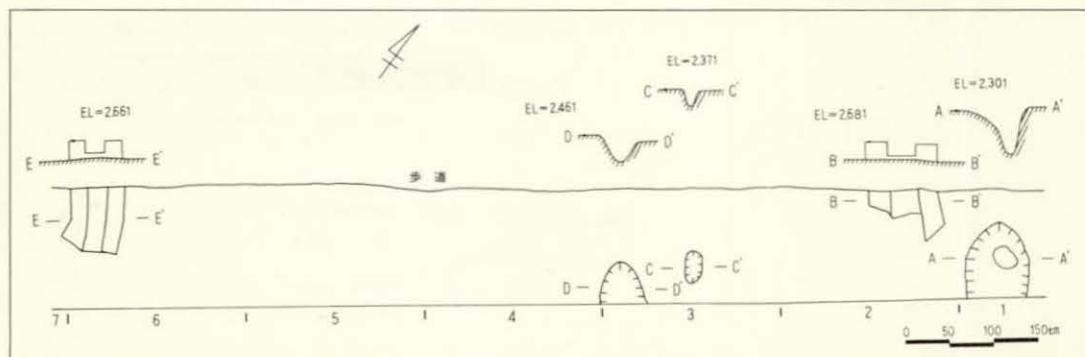


図-7 遺構実測図

(4) 遺物

名護貝塚出土遺物集計表

注) 個 g

〈A地区〉

層位	土 器										陶 器			磁 器			骨			
	口 緑 部			胴 部			底 部				合計	荒 焼	上 焼	碗	皿	その他の	獸 器	魚 器	石 器	金屬製品
	有文	無文	計	有文	無文	計	(びれ平底)	平底	計											
II	7	7	14	114	114	228	7	7	128	103	68	192	7	44	1	1	1	10		
	26	26	52	458	458	916	91	91	575	5,645	1,609	1,751	405	328	1	839	839	10		
III	1	3	4	1	94	95	4	4	103	16	3	2		13	11					
	5	19	24	4	264	268	23	23	315	265	6	7		70	7					
合計	1	10	11	1	208	209	11	11	231	119	71	194	7	57	12	1	1	10		
	5	45	50	4	722	726	114	114	890	5,910	1,615	1,758	405	398	8	839	839	10		

〈B地区〉

※ 1個は、小破片の為、形態が不明である。

層位	土 器										陶 器			磁 器			骨			
	口 緑 部			胴 部			底 部				合計	荒 焼	上 焼	碗	皿	その他の	獸 器	魚 器	石 器	金屬製品
	有文	無文	計	有文	無文	計	(びれ平底)	平底	計											
II	2	2	4	28	28	56	3 ⁽¹⁾	3 ⁽⁵⁾	36	27	11			1	4					
	9	9	18	81	81	162	26	26	977	422	92			6	34					

〈E地区〉

層位	土 器										陶 器			磁 器			骨			
	口 緑 部			胴 部			底 部				合計	荒 焼	上 焼	碗	皿	その他の	獸 器	魚 器	石 器	金屬製品
	有文	無文	計	有文	無文	計	(びれ平底)	平底	計											
III	1	1	2	3	354	357	15	4	19	377	68	41	1			19	97			
	2	2	4	735	741	238	61	299	1,042	656	383	2			35					

層位	土 器										陶 器			磁 器			骨			
	口 緑 部			胴 部			底 部				合計	荒 焼	上 焼	碗	皿	その他の	獸 器	魚 器	石 器	金屬製品
	有文	無文	計	有文	無文	計	(びれ平底)	平底	計											
II							2	2	1	1	35	102	63	19	1		25			
							28	28	7	7	4,412	3,875	669	35		358				

表-1 出土遺物集計表

出土する遺物には、土器・陶磁器・石器などの人工遺物とともに多くの貝類の出土をみた(表-1参照)。今回、発掘調査を行なった地区は、ほとんど攪乱層であり、国道と県道の交差する十字路の曲線部におけるA地区とE地区でまとまって土器や貝類が出土した。A地区について、各グリッドごとに集計したのをみると(各グリッド別の集計表は省略)、土器・貝類の出土は第III層の残る36番・37番グリッドに集中する。

(E地区についても県道につながる地点において包含層が確認され土器、貝類の出土をみた。)国道分の遺物の出土状況は、大半が攪乱層という状況であり、人工遺物の出土がきわめて少なく、土器片も小片ばかりである。

(イ) 土器

● 有文土器

有文土器についてみると、出土例はわずか5点である。3は沈線を横位に施し約2mm幅のヘラ描きによるものであるが、施文部がかすかに残っている。8、14、15は、縦位に凸帯を貼付けたものであるが、他の後期遺跡（久志貝塚、フェンサ下層）で出土している肩部から口唇部にむけて凸帯を延ばす土器にも類似するが、いずれも口縁上端が欠失しているため文様構成や口唇の形状はつかめない。

12の土器は有孔土器の破片と思われる。破損していてどのようにして穿たれたかは明瞭でないが、主に外面から穿ち、最後の細い調整を内面から施したようである。

● 無文土器

無文土器については、器面に粘土をおさえた指の跡や、刷毛目、ヘラなどによる調整痕が認められる。5の内器面のなで跡はヘラ幅がわかる。その他、胴部破片に削りや磨きによると思われる光沢のあるものや、粘土紐の境目といった土器製作上の工程を残すものもみられる。

口唇部の形態は、丸く整えてあるもの、平たくなるもの、尖るものなどがある。土器は全体的に焼きがしまり堅い。

● 底部

底部は34点得られた。小破片で形態分類をするには難点もあるが、多くは底面からの立ち上がり部の底面の一部と、くびれる箇所の残存する破片で、くびれ平底に分類される。

その他の形態の判然としない小破片については、集計表中()書で別個に不明として個数とグラム数を明記した。

底面が残り底径のわかるものは、3の土器1個のみで、3.7cmを測る。微小破片が多いため底径については不明だが、推計したものをみると、3cm~7cm程の底径を測るものと思われる。器内外面とも撫でにより平滑化しているものが多い。胎土は赤褐色で、石英粒・石灰岩片等を混入する。焼きは良い。



図-8 土器実測図・口縁部+有文

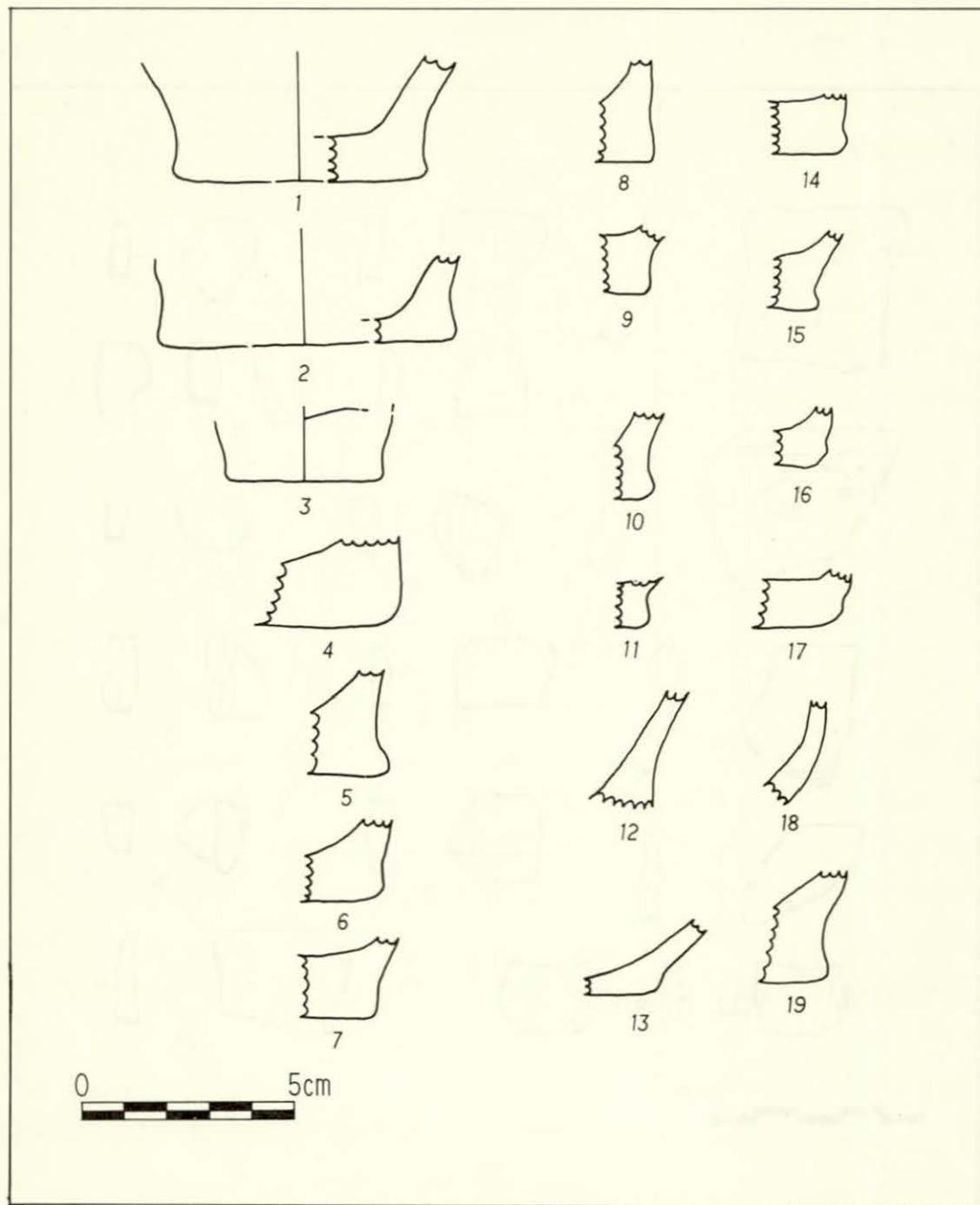


図-9 土器実測図・底部

(口) 石器

1点のみの出土である(図-10)。

右側辺を破損しており、表面と左側辺に使用痕がみられ、裏面は自然面を残す。使用の状況から砥石と思われるが、攪乱層からの出土であり、後世遺物の可能性もある。

石質は石英斑岩で、これらの材料は現在でも名護市内において産出する。

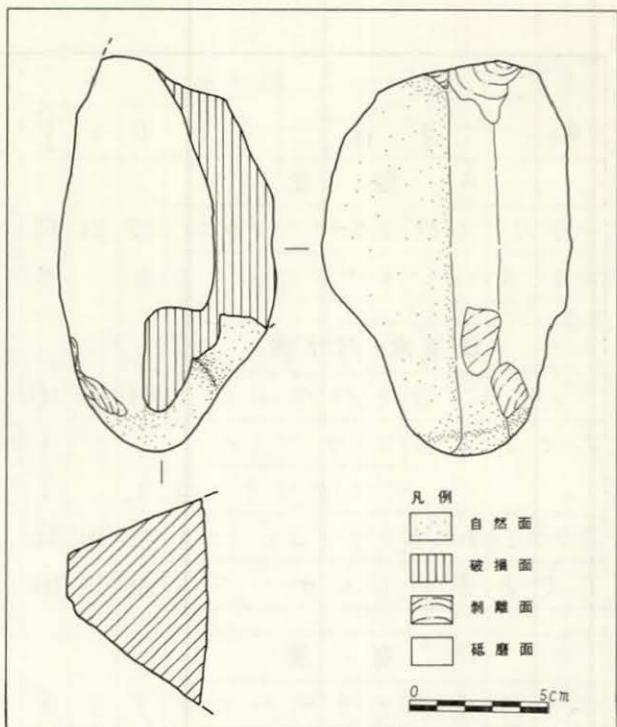


図-10 石器実測図

(ハ) 貝類

当貝塚から出土した自然遺物は貝類がほとんどで、36科77種、総個体数は約3,700個体である。大半が攪乱の状況で、人工遺物の出土がきわめて少ないので比べ、多くの貝類の出土を見た。名護湾を目前にして活発な生業活動がこの海岸砂丘地を拠点に展開されたものと想定される。

出土状況をみると、海産貝がほとんどで、なかでも総個体数の約半数以上は砂礫性・砂泥性のマガキ貝である。

陸産貝・淡水産貝も検出されるが、攪乱を受けていたため、層序別の統計処理は難点が多い。また、小範囲の発掘調査資料であるが、この出土量から推して、当時の貝塚人の食料採取はかなりの部分海に依存していたと考えられる。

分類は、陸産・淡水・汽水産・海産をそれぞれ科別にまとめ、棲息地を記号で示した。

科	種	層	地区名			A			B	E			F	総合計	棲息地
			II	III	合計	II	III	合計		II	III	合計			
A 陸 産															
やまたにし科	オキナワヤマタニシ		37	24	61									61	
おなじまいまい	オナジマイマイ		9		9									9	
B 淡水・汽水産															
うみにな	キバウミニナ		94	47	141	8	156	164	320					469	c
あまおぶね	シマカノコ		1		1									1	b
	ドングリカノコ		1		1									2	b
とうがたかわにな	タケノコカワニナ		12	4	16		2	6	8					24	a
しじみがい	シレナシジミ		119	41	160	3	27	27	54	6				223	c
C 海 産															
にしきうず	サラサバティ		1	7	8	4	1		1	5				18	g
	ギンタカハマ		1		1									1	g
	クロサンショウガイモドキ						1		1					1	b
りゅうてん	カシギク			3	3		1	1	2					5	b
	チョウセンザザエ						1							1	g
あまおぶね	アマオブネ		4	1	5			1	1					6	b
たけのこかにもり	オオシマカニモリ			1	1									1	b
うみにな	マドモチウミニナ		4	2	6									6	a
おにのつのがい	オニノツノガイ		4		4	2	1	2	3	5				14	e
すいしようがい	クモガイ		19	8	27	10	2	12	14	9				60	d
	ネジマガキ		6	1	7		3	6	9					16	d
	マガキガイ		658	178	836	137	351	539	890	105				1,968	a
	オハグロガイ		3		3									3	d
	スイジガイ		2		2			2	2	7				11	e
たまがい	フタスジタマガイ		1		1									1	d
	クリイロリスガイ		3	2	5			2	2					7	d
たからがい	ハナマルユキ		5		5	1								6	b
	コモンダカラ		1		1	1								2	b
	ヒメホシダカラ		1		1									1	b

表-2-1 貝類集計表

科	種	地区名			A			B	E			F	総合計	棲息地
		II	III	合計	II	III	合計		II	III	合計			
		II	III	合計	II	III	合計		II	III	合計			
りゅうてん	コシダカサザエ	1	2	3								3		b
ふじつがい	ククリボラ	1		1								1		g
あくきがい	センジュガイ	2		2		1	1	2				4		g
おにこぶし	コオニコブシ		1	1		1		1				2		b
	オニコブシ				2							2		g
いとまきぼら	チトセボラ	1	2	3	3		1	1		7		4		g
	イトマキボラ	9		9								19		e
まくらがい	ジュドウマクラ		1	1		1						1		f
	サツマビナ							1				1		d
いもがい	ナンヨウクロミナシ	1		1			2	2				3		d
	アカシマミナシ	1		1		1		1				2		d
	イボシマイモ	3	3	6	1	1	2	3				10		e
	コモニイモ				1							1		d
	サヤガタイモ	1		1								1		b
	アンボンクロザメ	20	1	21	9	9	13	13		5		57		d
	ヤナギシボリイモ	1		1								1		e
たけのこがい	タケノコガイ				1							1		f
おりいれようばい	オリイレヨウバイ	3	1	4		1		1				5		d
うみぎく	ウミギク	20	3	23	3	1		1		8		35		e
	ヤスリメンガイ	18	2	20	6		1	1		9		36		e
いたぼがき	オハグロガキ						1	1				1		b
	イワガキ	2		2								2		b
	ノコギリガキ	6	6	12								12		b
	マガキ	18	16	34						1		35		b
かぶらつきがい	カブラツキガイ	3	1	4								4		d
	ウラキツキガイ	5		5								5		d
ふねがい	リュウキュウサルボウ	57	15	72	31	18	24	42		35		180		d
ざるがい	カワラガイ	23	3	26	2	4		4		11		43		d
	リュウキュウザルガイ	30	2	32	1	1	1	2		5		40		d
にっこうがい	リュウキュウシラトリ	12	6	18						1		19		d

表-2-2 貝類集計表

科	種	層	地区名			A			B	E			F	総合計	棲息地
			II	III	合計	II	III	合計		II	III	合計			
			II	III	合計	II	III	合計		II	III	合計			
しゃこがい	シラナミ		14	3	17	4	4	9	13	15	49		e		
	ヒメジヤコ		14	2	16	5	1	7	8	1	30		e		
	ヒレジヤコ		11	4	15	2		2	2	7	26		g		
まるすだれがい	ヌノメガイ		3		3	1	1	2	3		7		f		
	オイノカガミ		3	2	5	1	3	1	4	1	11		f		
	アラスジケマンガイ		28	3	31	2	20	39	59		92		a		
	ダテオキシジミ		5		5						5		a		
	チョウセンハマグリ		1		1						1		f		
	スダレハマグリ		4		4						4		a		
	ヤエヤマスダレ		1		1						1		d		
	マルオミナエシ									1	1		d		
	ばかがい	ベニハマグリ	2		2						2		d		
		リュウキュウバカガイ	6		6		1	2	3	1	10		d		
		アリソガイ	1		1						1		d		
ふじのはながい	リュウキュウナミノコガイ		1	1	2						2				
りゅうきゅうますお	マスオガイ		2		2						2				
	リュウキュウマスオ		6		6		1		1		7		d		
うぐいすがい	クロチョウガイ									1	1		g		
きくざるがい	カネツケザル		1		1						1		e		
たまきがい	ソメワケグリ		6		6		2	2			8		d		
ちどりますおかい	イソハマグリ		3	7	10		2	2			12		d		

表 2-3 貝類集計表

棲息地の記号

A. 陸 産

オキナワヤマタニシ, オナジマイマイ

B. 淡水・汽水産

- a. 河口泥底
- b. 河口岩場
- c. マングローブ泥底

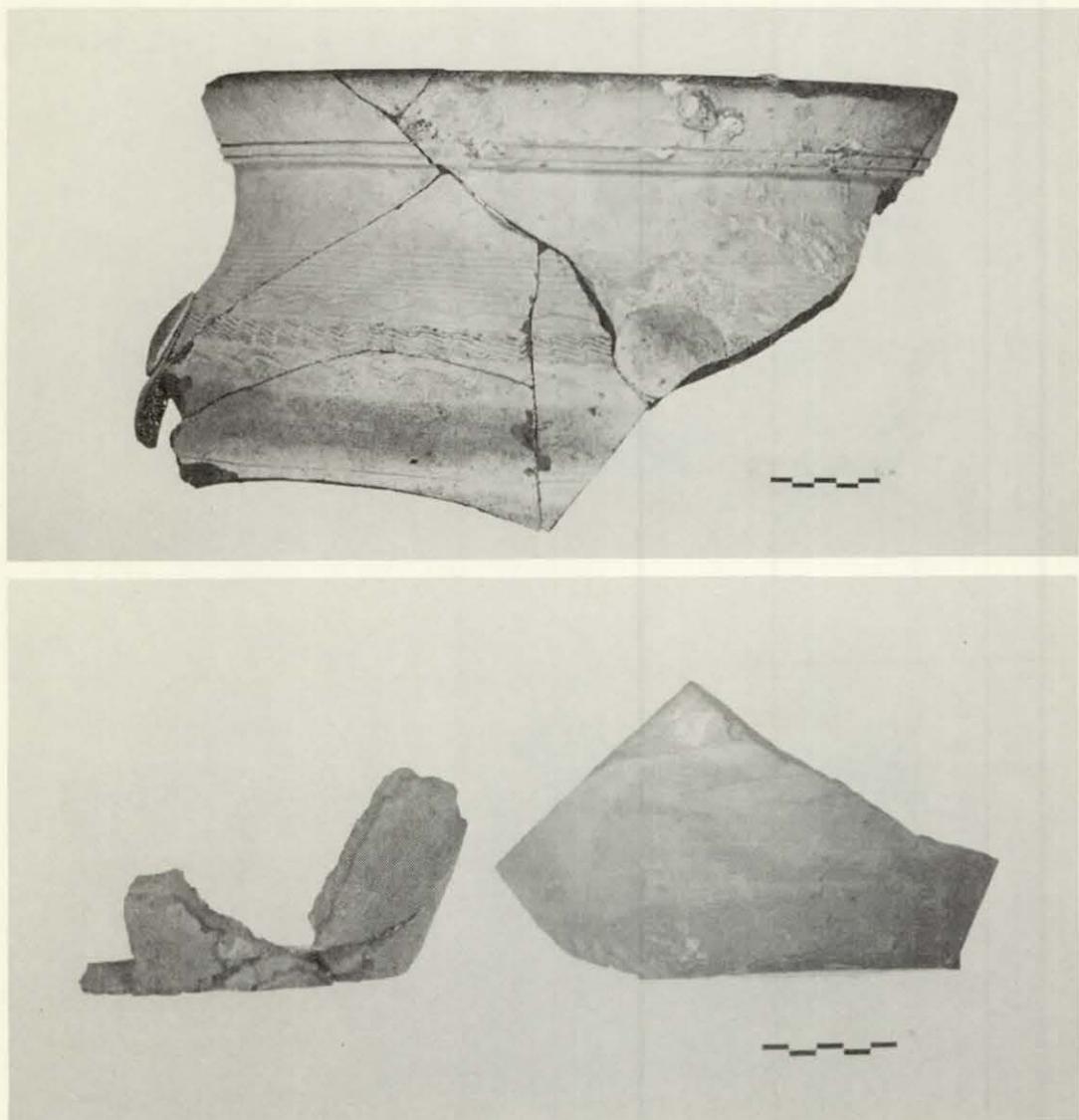
C. 海 産

- a. 潮間帯 砂・砂泥地
- b. 潮間帯 岩礫・岩礁地
- c. 潮間帯
- d. 潮間帯下 砂・砂泥地
- e. 潮間帯下 岩礫・岩礁
- f. 潮間帯下(リーフ外)砂地
- g. 潮間帯下(リーフ外)岩礁

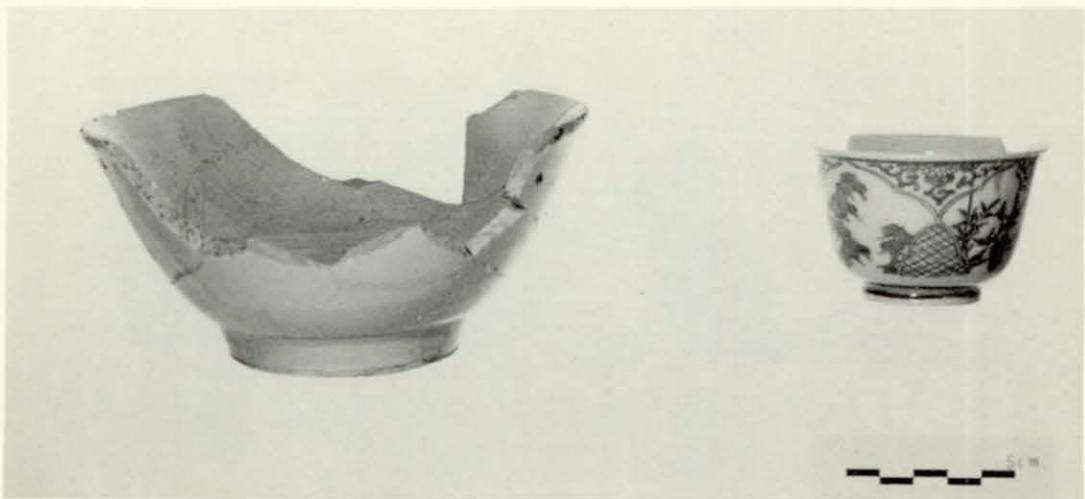
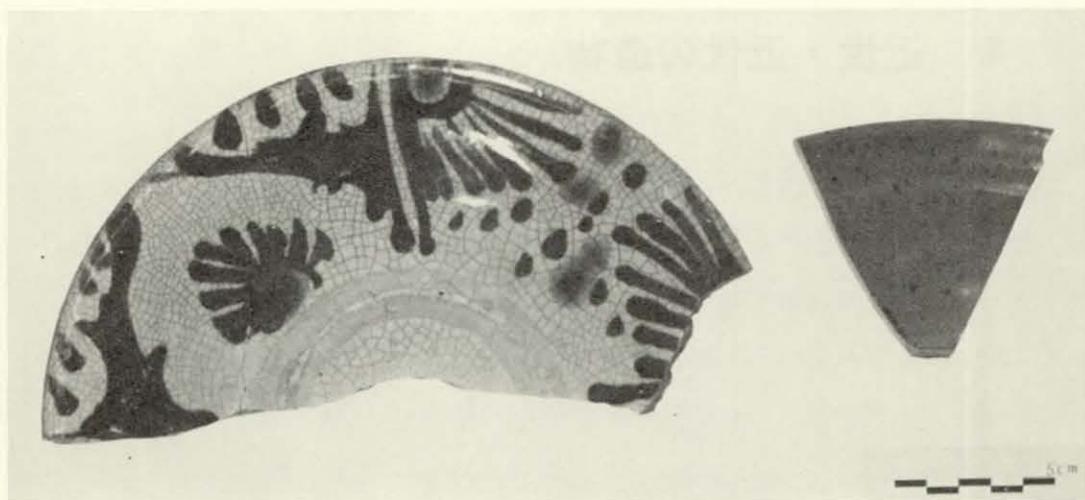
4. 近世・近代の遺物

道路のため最も掘り返される頻度が高く、埋設物の多い側端部のため、貝塚時代の層を壊す形で排水溝が作られ、日用雑器の陶磁器類が数多く得られた。壺屋陶器の染付大皿や、水甕（波状帶文）、アンダガーミ、香炉、花生、碗等が出土した。

古我知焼とみられる碗、アンダガーミなどもみられる。その他、キセルの吸口が1点と、現在でも使われている日用雑器の陶磁器類の破片が数多く出土した。



図版-1 陶器



図版-2 陶磁器

5. 調査の成果と課題

今回の調査は、すでに述べたように、国道58号線の側溝工事に係る緊急発掘調査として実施されたものである。

調査は、人の通りも交通量も激しい市街中心地での調査であるため、調査期間、区域等制約があった。そのため、遺跡範囲に係る工事箇所の全面調査には、工事関係者、発掘調査関係者双方とも大きな負担を伴った。

名護貝塚は、名護湾に面した海岸砂丘地に形成された沖縄貝塚時代後期の貝塚遺跡である。古くから知られていた遺跡であるが、今回が初めての発掘調査であり、国道部分はすでに破壊された状況で出土遺物も全体的にみれば乏しいのであるが、特徴的なものをあげて検討していきたい。

土器形態については、①薄手で焼成が良い、②無文化が進んでいる、③底部の形態はくびれ平底が主体である、④器面調整については刷毛目や指頭圧痕、ヘラ、指などあるいは磨きといった手法がみられる。

自然遺物については、今回発掘箇所が攪乱を受けているということで、若干後世遺物が混じっていると考えられるが、人工遺物の出土量から見れば、大量といえる貝類の出土をみた。貝類でも、陸産・淡水産・海産ともに出土するが、海産貝が量的に多く、当時の貝塚人たちの食料採取の傾向を示し、貝類捕食が定着していたと思われる。

国道部分における人工遺物があまりにも少なく、名護貝塚の時期的な検討は、県道からの出土品もあわせて論ぜられなければならないが、これまでの表採資料、遺跡の立地などから編年上の位置づけは、沖縄貝塚時代後期の後半（約、1,000年前頃）に属するものとみられる。

次に名護貝塚の広がりについてみると、今回調査区域の国道・県道分にあわせてまだ広がることが明らかになった。今回の調査で砂層の堆積の様子をほばつかむことができ、道路中央部や宅地に遺物包含層が残っている可能性のあることが確かめられた。

図-3、4に示したように、宅地や、道路等の遺物包含地を明確にする作業が急がれる。また、名護十字路のE地区において、ヒンブンガジマルに向かって遺物包含層が検出された。ヒンブンガジマルの北側においては、アパスク貝塚（後期）として遺物の採集される場所があるが、これらも含めて名護貝塚の全体的な広がりをつかむのは

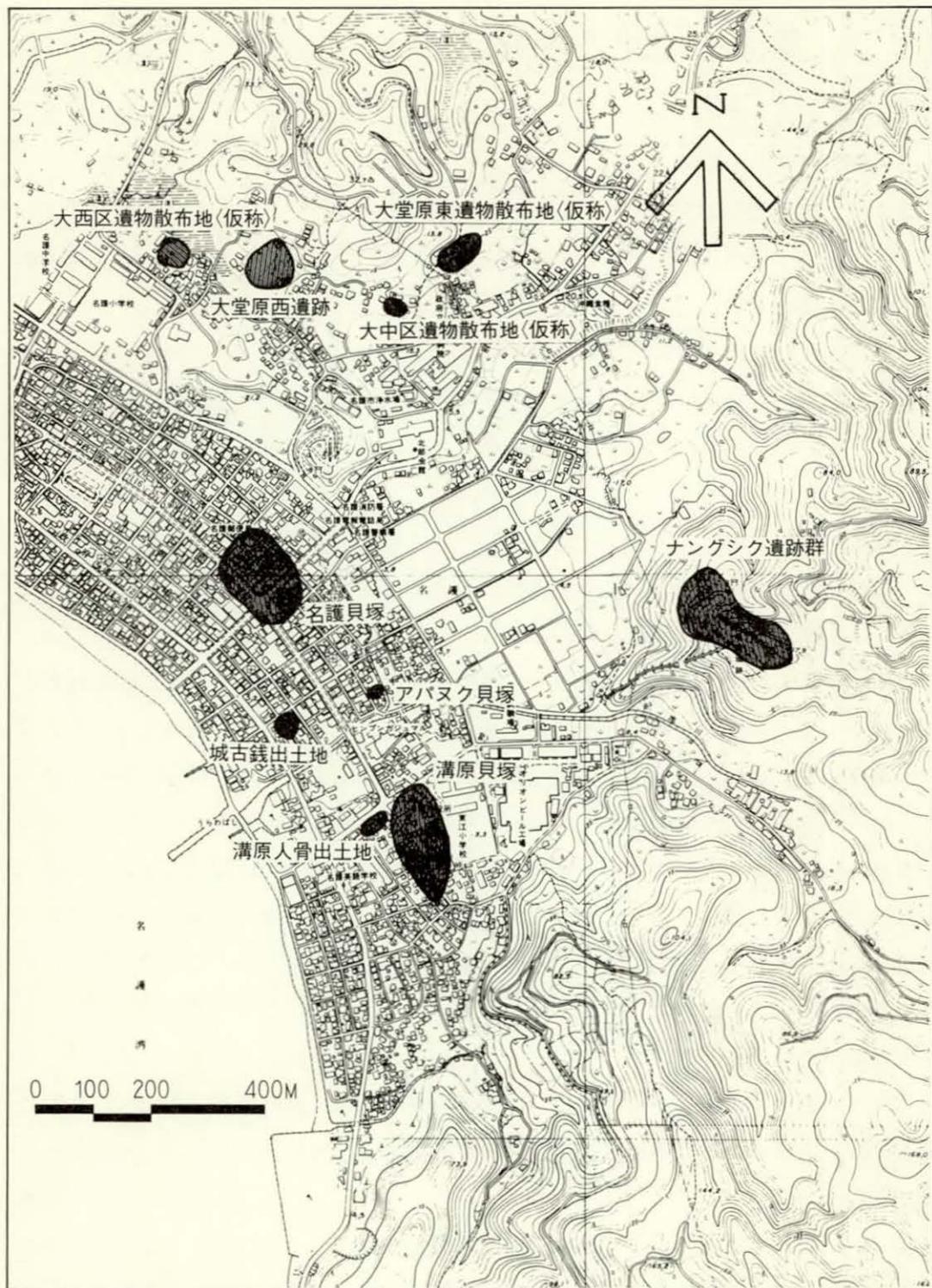


図-11 周辺の遺跡

これから重要な作業である。

名護貝塚の今回の調査は、国道・県道と開発部局の管轄の相違で、国道は名護市教育委員会、県道は沖縄県教育委員会がそれぞれ分担して調査報告するという変則的な形で報告書が出る運びとなった。遺跡は行政の管轄で分断されるものではなく、今後は双方とも有効な方策を考える必要がある。

以上、今回の調査によって名護貝塚は、沖縄貝塚時代後期後半の時期に生活がくりひろげられた場所だということが明らかにされた。

市街地ということでその分布範囲も知られてなかったが、今回の調査で道路路盤下や宅地において遺物包含層が残っていることが知られ、全壊と思われていた名護貝塚の立地する砂丘の堆積の様子がつかめた事は、1つの成果である。

遺跡は、一度破壊されたら二度と元に戻すことはできず、今回の国道部分のように遺構面まで攪乱を受けた状態では調査の成果はあがらず、せいぜい遺物採集作業に終ってしまう。今回の発掘区域は側溝工事箇所に係る部分のトレーナー発掘ということもあって、名護貝塚の全貌を解明するにはほど遠いが、しかし、貝塚の広がりをつかむ大きな手がかりは得ることができた。

今回の名護貝塚の発掘調査実施に当っては現場に混乱を引き起こし、行政当局に批判が集中した。これを教訓に、周辺に遺跡が確認されている場合は、事前に十分協議を行ない、計画策定に当るよう関係当局に望みたい。

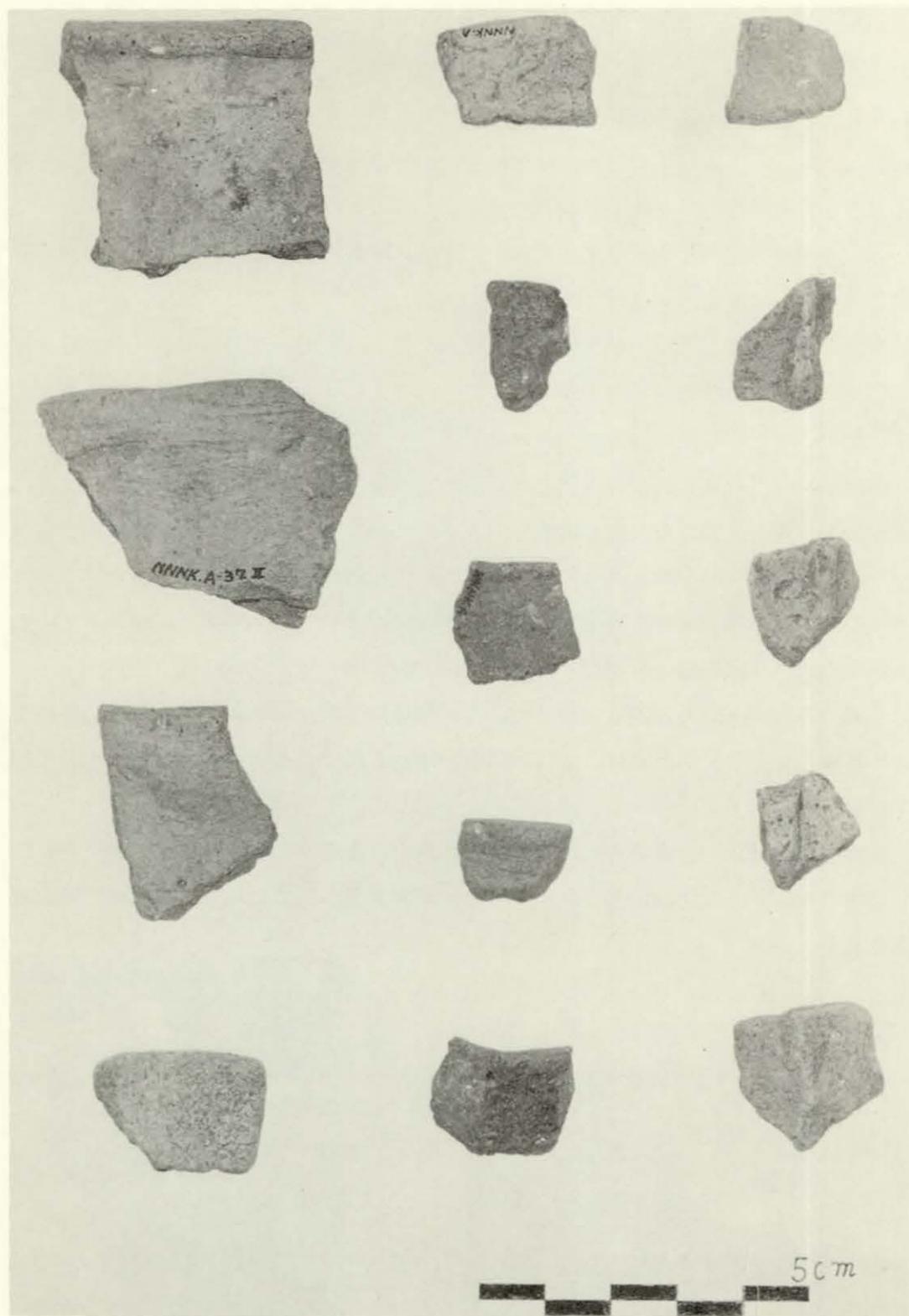
今後、都市計画の諸事業を進めるなかで、地中に埋もれた名護貝塚群が破壊されることのないよう、文化財保護当局と十分な協議・調整が必要であり、柔軟な対応が要求される。

△調査終了後の名護貝塚

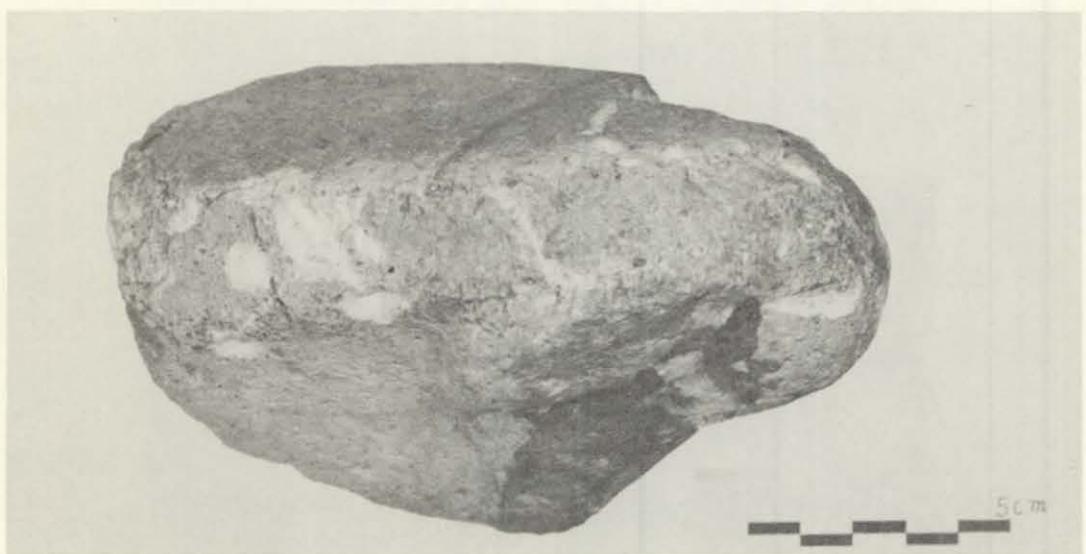
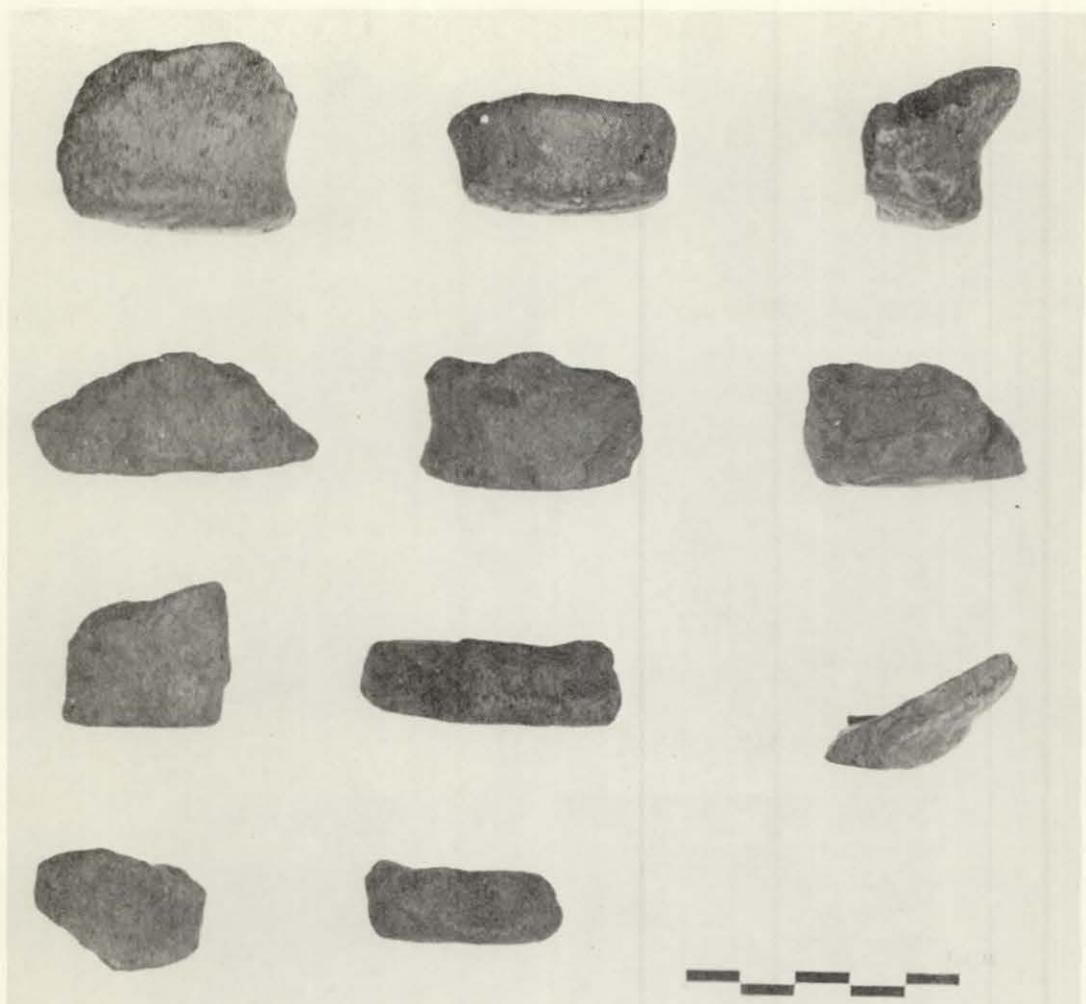


▷発掘現場で出土品を展示

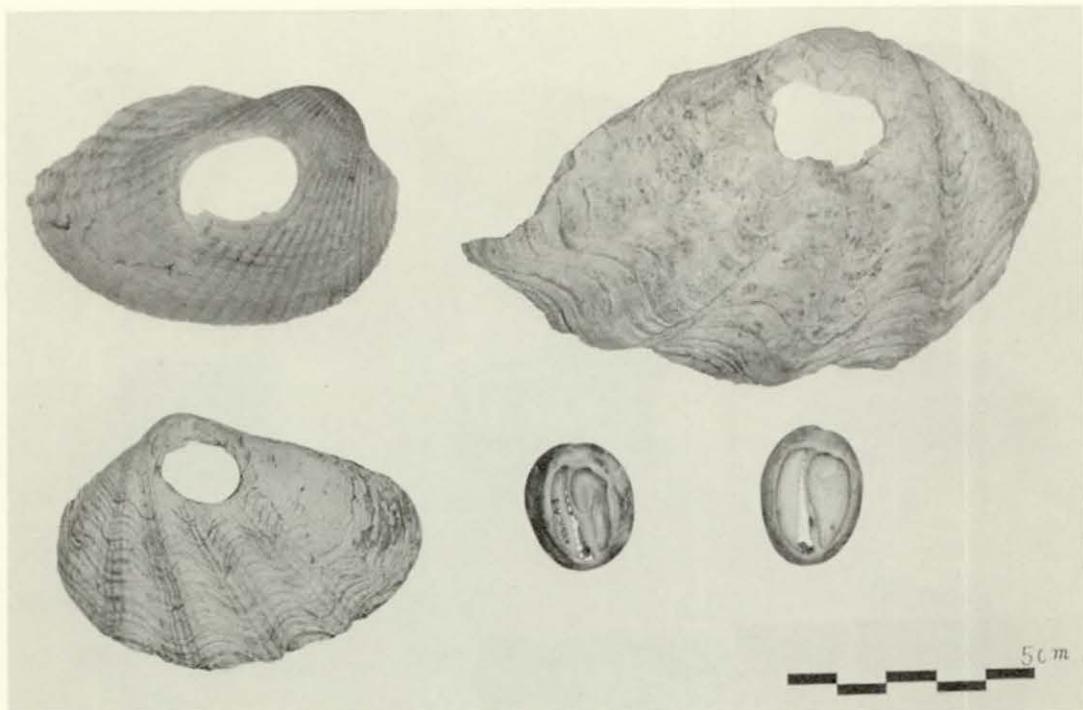




図版-3 土器口縁・有文



図版-4 土器(底部)・石器



図版-5 貝製品（穿孔貝）



▷
A地区



▷
B地区



▷
E地区



▷
F地区

図版-6 各地区的状況

おわりに

名護貝塚の発掘現場は市街地の中心部であるため、発掘作業員の方々には、工事・一般車両それに入通りの多いなか発掘作業に携わっていただきました。

また、調査期間中は、商店街振興組合、通り会の方々からお茶、菓子類の差入れがそのつど届けられ、調査団一同感謝の念でいっぱいです。

工事施行業者の阿波根組からは、保安対策や調査へ積極的な御協力が得られました。

当初、工事の遅れで調査団へもきびしい批判が向けられていましたが、作業が進むにつれ、多くの市民、通り会の方々からも埋蔵文化財へ関心と理解が得られたことはなによりの喜びです。

最後に、事故もなく発掘作業を進めることができましたことを調査にかかわっていただきいた多くの方々に感謝申し上げます。

調査員

- ・大城 剛 (沖縄県教育委員会 文化課)
- ・島福善弘 (名護市教育委員会)
- ・渡具知伸 (名護市教育委員会)

事務局

- ・比嘉良則
- 中村誠司
- 稻嶺 進

発掘作業員

- | | |
|-------|-------|
| 金城トシ | 金城フミ |
| 大城スエ | 新城シズ |
| 石川君子 | 石川シズ |
| 屋部政子 | 石川きみ子 |
| 松本ヨシ | 比嘉良勇 |
| 伊良波行訓 | 津波古充誠 |
| 嘉味田シゲ | |

- ・印は本文執筆及び図版作成

参考文献

『フェンサ城貝塚調査概報』 1969

琉球大学法文学部紀要社会編第13号

友寄英一郎

嵩元政秀

『喜如嘉貝塚発掘調査報告書』

大宜味村教育委員会 1979

『久志貝塚緊急発掘調査概報』

名護市教育委員会 1980

『名護市の遺跡（2）・分布調査報告』

名護市教育委員会 1982

『古我知焼』

大城精徳・宮城篤正編 1972琉球文化社

『琉球の古陶』

諸見民芸館 1982

『石器時代の沖縄』

沖縄考古学会編 1978新星図書

『沖縄歴史地図』 考古編 1983柏書房

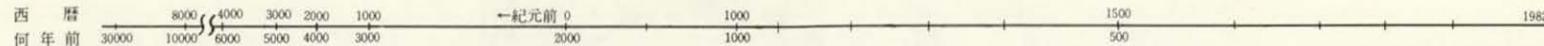
宮城栄昌 編

高宮廣衛

『島嶼の考古』 創刊号 1977

沖縄国際大学考古学研究会

名護市の遺跡編年—時代区分表



中 国	旧石器時代	(仰韶・竈山)	殷 周	春秋戰國	前漢 後漢	北魏	唐	北宋	南 宋	元	明	清	中華民國	人民中國	
日 本	旧石器時代	(裕 文)	(弥 生)	(古墳)	大和	奈良	平 安	平 安	鎌 倉	南北朝	室 町	(戰 國)	安土桃山	江 戸	明治 大正 昭 和

生産経済		漁 捕・狩 獣・植物採集						農業						工業		
時代		原 始			原 始			古 代			近 世		近 代		現 代	
沖 繩 本 島	考古学 の編年	先土器		沖 楩		貝 塚		時 代		グ シ ク 時 代			古 琉 球			
		早期		前 期		中 期		後 期		前 期		中 期		後 期		
		時代		時代		時代		時代		時代		時代		時代		
		屋我地		大堂原貝塚		運天原サバヤ貝塚		シマスハーフビン遺跡群								
		名護市		豊屋原遺跡		豊屋原浜崎遺跡				屋我グシク遺跡群						
		羽地				奥武原遺跡		フガヤ遺跡		親川グシク遺跡		瀬洲村路遺跡		古我知燒窯跡		
		屋部						安和貝塚		宇茂佐古島遺跡						
		名護				名護貝塚		ナシグシク遺跡群		宮里古島遺跡						
		久志		有浦遺跡		久志貝塚		久志貝塚		上里グシク遺跡		喜手村遺跡				
				大川田原遺跡												
		主他な遺跡の		港川フサ 遺跡(鹿児島 市川町第1 洞穴)		塩川貝塚下層 (沖櫛)		大山貝塚(宜野湾) 西長浜原遺跡(今帰仁)				相模遺跡(大里)				
				野田貝塚(喜手村) 伊波貝塚(石川)		喜堂貝塚(北中城) 宇佐浜原遺跡(国頭)		熱田貝塚		熱田貝塚(恩納)		今帰仁グシク(今帰仁)				
				喜志貝塚(喜志村) 伊波貝塚(詫谷)		カヤウチバシタ遺跡(国頭)		具志原貝塚(伊江)				根謝銘グシク(大宜味)				

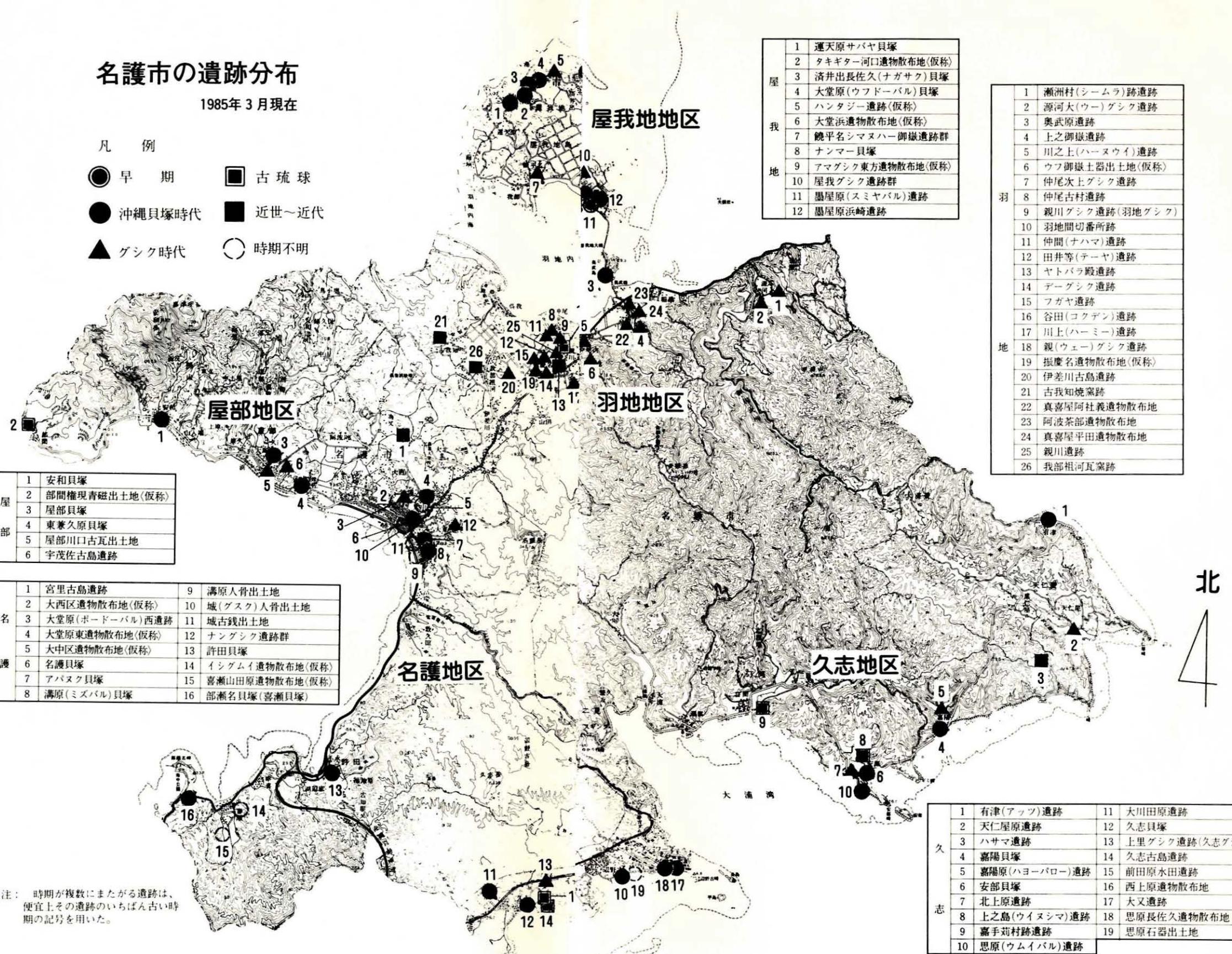
※名護市の遺跡(2)より

名護市の遺跡分布

1985年3月現在

凡 例

- 早期
- 古琉球
- 沖縄貝塚時代
- 近世～近代
- ▲ グシク時代
- 時期不明



- 9046



名護市文化財調査報告－7
名護貝塚 緊急発掘調査報告

1985年3月25日

編・発行：名護市教育委員会 社会教育課

名護市字名護905番地

TEL 0980(53)-1212 内線 123

印 刷：崎 浜 印 刷 所

TEL 0980(52)-2740

昭和4年頃の名護(作成:東江小学校P.T.A.)

